

研究通信

No. 3 87

1960.10 刊
研究会局
社会事務
村落
東京都文京区駒込1-7
東洋大学
社会学部研究室

〇八回村研年次大会を目前にひかえて

木林富男

〇八回村研年次大会は、いよいよ来月三・四日の二日間愛知県蒲郡で開催される運びになりました。不慣れな仕事——事務局というものをお受けけし、なんとか年次大会を有意義に成功させたいと願い、その笑でできる限りの力を注いだつもりですが、会員諸氏にこ満足のいただける事務処理や大会運営準備ができなかつたことを深くお詫び致さねばなりません。特に、年次大会の準備万全について、愛知大学川越萍二会員をはじめその地元の会員のおしみない助力を感謝致します。

〇八回村研大会の課題が、昨年に引き続き「政治体制と村落」とくに「政治と農民」の問題を掲げたことは、激動する社会情勢下にあつて、真に意義深いものがあると思います。こうした現代的課題

に真向から切り込むことが、数多くの方々から無言のうちに望まれていることを思うとき、本年度の大会议の諸々の討議およびその結果生まれるであろう成果を、心まことに持つ気持ちでいっぽいです。村研の会員諸氏が、社会学・政治学・経済学・法律学等々、社会科学の多くの分野から組織されていること、このことは本年度の課題を分析・検討するときに、限りない力強さをもつものと考えます。それぞれの研究分野からの考察が、村研大会でどこまで一本の太い柱になつてあらわれるか、それが期待されるからです。

なお、こんどの大会が川越会員の御尽力を蒲郡の宿舎に合宿討議の形式でおこなわれることも、こうした研究大会のひとつの方としておおいに期待されていいと思います。もちろん、村研にそうした経験が全くないわけではありません。かつての鳴子会場では、参會者の大部分が会場になつた「農民の家」に合宿して連日ブログラムにもとづく研究発表会がおわつたあとも、インフォーマルな形で談話に花をさかせ、おおいに効果をあげたことを記憶している方は多いと思います。しかし、それはたまたま多數の会員がひとつの宿舎に泊りあわせた偶然の機会からで、こんどのようには、最初からその目的で宿舎の設営や会場の準備のなされたことは、はじめてではないかと思います。そして、こんな機会にこんな問題を論ずるには地元の農村指導者や婦人・青年など、各層の人たちとも一夕懇を交えて懇談し、地元の生の声をきいて討議の材料にするのもひとつ的方法ではないでしょうか。

いつれにしても、せつかくのこの企図を、参加会員の皆さんに充分に利用されるよう切望してやみません。

最後に、事務局を引き継ぐに当たり、村研がますます発展すること、その研究成果が広く生かされることを祈つてやみません。これは同時に、会員ひとりひとりの責務でもあると存じます。